

飛鳥

2016年

春隣号

第 189 号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail:info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



初詣

年始の高知市では気温が20度を超える日があり、名実ともに「暖冬」だった今季。

異例の暖かさのまま春がやってくるのかと思いきや、突然の寒波襲来、寒さの底で大寒を迎えました。

寒さはつらい。——けれど、冬らしい寒さを越えてこそ、先の季節が一層明るく思えるのかもかもしれません。

ご挨拶	2
おのころじま奮染記 7	田島征彦 3
あすへの歩跡 8	大澤重人 4
いろいろかいろ 宅	安藝眞一 5
キルギスタンからコンニチハ ㊦	氏原名美 6
「暮し」を残す	前田 紀 7
今、思うこと	町田樹生 8
文章カレレベルアップ講座 (18) ㊦	水木和香 10
催し物案内板	11
わが家の太郎 ㊦	永野雅子 12

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

謹賀新年

新年明けましておめでとうございます。

昨年も多くの皆様にご支援をいただき誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

飛鳥にとって二〇一五年は変革の年でした。そんな中で特に感謝をしたのが飛鳥の社員の皆さんです。厳しい状況の中で全員が責任感を持って業務に向き合い、しっかりと遂行してくれたことに誇りを感じております。代表者として現場の社員から学んだことも多くありましたし、手前味噌になりますが、昨年の飛鳥の組織力、個々の能力の成長には眼を見張るものがあったと自負しております。

二〇一六年、飛鳥にとってまだまだ超えるべき壁は多いですが、伸び代も充分にあります。社員一丸となり更なる成長を重ね一皮も二皮も剥けていきたいと思えます。引き続きのご支援助とご協力のほど心よりお願い申し上げます。ご挨拶に替えさせていただきます。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

代表取締役社長 永野 正将



おのころじま 大奮

ふんせんき

田島征彦

7. 土佐で踊るサバンナの縞馬

(3) かわら版

ぼくは型染で作品を制作している。型染は、切り絵のように切り抜かれた型紙を、布の上に置いて、へらで友禅糊を型紙の上から乗せてゆく。型紙をはずすと、型紙の穴の部分から糊が布に付く。糊を乾かし染め水洗いをする。一点の作品を制作するには、必ず一回や二回の水洗いをしなければならぬ。

おのころ島（淡路島）へ越してきて、何よりも冬の厳しい寒さがなかった。それまで住んでいた京都・丹波の冬に型染制作は地獄だった。野外の水槽には厚い氷が張っていた。氷を叩き割って、大きな布を浸けて糊を落とすために洗う。冷たい水に、糊はなかなか溶けない。夫婦で半分泣きながら、洗った。

二〇〇六年、高知県立美術館で「激しく創った!! 田島征彦・征三の半世紀展」が企画された。ぼくは県立美術館でどんな展覧会ができるかを考えるために、何度も高知へ帰った。

美術館の建物に囲まれた中庭が、広い池になっている。美術館の建物から池の中へ向けて、型染作品を垂らしてはどうだろうか。何本も



の色とりどりの型染が、池の上に翻っている情景は想像するだけでも、ダイナミックで楽しい!!

早速、幅2.5メートル、長さ20メートルの布を十本ほど、染めることにした。妻のヒデコは大反対。

「そんな大きな布を五本も十本も、どこで、どうやって染めるの!? 自分の歳を考えたことがあるの!?!」

その時は、ぼくはまだ六十五歳だったけど、彼女と話し合いの結果、布は三本で妥協することとなった。

二〇〇五年の歳の暮から、隣の畑を借りて、杭を打たせてもらい、20メートルの型染を染めた。水を含んだ布は重たい。20メートルを染めるのは初めてだ。冬の島は、口丹波に比べたら暖かいとは言え、夫婦で全身ズブ濡れになって、三本の20メートルは染めあがった。

三本の20メートルの布には、何十頭ものサバンナの縞馬が踊っている。南国の太陽の中で、高知県立美術館の中庭の池の情景は、十年経った今も、ぼくの心の中には、まだ、激しく跳びはねているのだ。

たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染色図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。最新作『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

あすへの歩跡

8

大澤重人

比較文学から平和学へ。「平和資料館・草の家」(高知市升形)との出会いが人生を変えた。

高知に移り住んだのは、英文学者の夫が高知女子大(当時)に赴任した一九八一年。草の家は八九年の設立時から会員だったが、英語力を買われ、九二年に平和博物館の第一回国際会議へ派遣された。会場は後に自身が学ぶことになる英ブラッドフォード大だった。「旅費は会員のカンパでした。草の家の活動をしっかり伝え、現地で聞いた話も伝えなければとニュースを発行したのが平和学との関わりが始まりです」。それまでは日系米国人の母親の影響で、日系米国文学が専門だった。

平和関連の国際的な学会に複数所属し、大会があると、現地の資料館を訪ねた。海外で目立つのが、兵士を英雄視する戦争(軍事)博物館。武器や軍服などを展示していた。共感したのは、欧州に多い抵抗博物館だ。ナチズムに抵抗し

た人を紹介し、学校でも習い、次の世代に伝えようという意識を感じた。

翻って日本。たとえば、監獄で拷問された高知市出身のプロレタリア詩人の横村浩(一九一二〜三八)。「高知以外で、学校で教え

戦争の愚、物に語らせる

立命館大国際関係学部准教授(平和学)

国際平和ミュージアム副館長

山根和代さん(64)



やまね・かずよ

山口県周防大島町(現在)生まれ。同志社女子大学芸学部英文学科卒業。1983〜2010年、高知大非常勤講師。高知に居住しながら、06年に英ブラッドフォード大大学院で平和学の博士課程修了。30年間暮らした高知は第二の故郷。3人の息子が高知育ち。11年から現職。18カ国の留学生相手に英語で講義する。訪問した国は23カ国にのぼる。京都市在住。

【写真：胸のバッジは反核平和運動のシンボル】

られているでしょうか」

国内の博物館・資料館は、特に公立で、中国への侵略戦争など日本の加害の展示が次々と姿を消している。その中で草の家の姿勢を評価する。「日本の侵略で中国人がどれだけ苦しんだかや、性奴隷(従軍慰安婦)とされた方の描いた絵を展示しています。小さいながら総合的な取り組みはすごいなあと思います」。活動を継続して英語で発信したところ、イタリア・ミラノとスペイン・バレンシアで草の家を参考にした

活動が芽吹いた。年々、戦争体験者が減っていく。「今後は物に語らせる役割が大きくなります」

副館長を務める国際平和ミュージアム(京都市北区)に、黒こげのベルトのバックルが展示されている。気づかず素通りしてしまうかもしれない。立命館大名誉教授だった故永原誠さんの父親の遺

品だ。広島で被爆し、真っ黒こげの「物体」に唯一焼け残っていた父親の遺体だと確認する決め手となった。そうした無念の思いを知ると、物が語り出す。「原爆のすごさを感じますね」。山根さんの父親も広島市の爆心地二・五キロで被爆し、腕にケロイドがあった。

展示をただ見るだけでは伝わらない。背景を伝える仕掛けが必要だ。若い世代には「戦争が遠い昔の出来事でないことを知り、今、自分に何ができるか考えてほしい」。

パリの同時多発テロを機に、過激派組織「イスラム国」の支配地域に対するシリア空爆が本格化している。「空爆で問題は解決しません。貧困やマイノリティーへの差別など、テロの原因を一つ一つ摘むべきです。生まれたときからのテロリストはいません」

研究室に相談に来た学生には、お菓子を出す。見解は揺るぎないが、ぎすぎすした感じはない上品な人だ。

おおざわ・しげと

毎日新聞大阪本社編集局編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。最新刊「泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡」。

いそいそ かいろ

その十七

盗作

安藝眞一

仕切り直しの新国立競技場は、隈研吾案に決定、着工に移ったが一方の五輪エンブレム盗作騒動のその後はいかばかりか？ この稿の印刷される頃には代案の審議が終って当選作が発表されるかと推量される。

当初、定められたエンブレムがベルギーのリエージュ劇場のロゴに酷似している事、劇場側が日本の五輪組織委員会を「盗作」と矢を放って告訴した事で火が付いた。

日本のエンブレムがベルギーの盗作であったかどうかは未だに不明の謎。事の真相を解く鍵は、要するにエンブレム担当のS某氏が「盗った」のか「盗らなかつた」

の一点。本人の自白はどうかである。S某氏は「盗ってない」を主張しているのだが、別件盗作を認めてエンブレムも取り下げてしまった。「盗ってない」と主張したが組織委は、疑しくは罰せずーを通り越して罰した。限りなくグレイに近い盗作と断じたのである。くらべて見てベルギー側は本腰を入れた告訴の力もあって作品そのものは毅然とした美しさを保っている。一転、S某氏のエンブレムは照れにも似た含羞があつて、どこともなくうっ向き勝ちな造形が見てとれる。「盗ってない」と公言しても、その作品には何やらうしろめたさが線になり形となつて出ている。自白の有無にかかわらず作品の顔つきに真相が浸み出してくるものなのだ。

作品が盗作か否かという判定は至難の技。盗みがあつてもなくても似ている似ていないは判る。それをクロと断じる事はもはや不可能で、あとは自白を待つしかない。その自白が「盗っていない」と反転した瞬間、作品の持つ「含羞」の線と形が張り出して真相のかたちを造りあげるのだ。

私も、自分のデザイン作業を振り返って見ると「盗った」事は

皆無だが、「盗られた」事はいくたびか経験した。「盗る」よりも「盗られる」方が遥かに精神的には楽なものだが、私から「盗った」デザインを押し付けられた企業は哀れである。当方としては「盗られる」という事は空巢に侵入された思いで、取り押さえようもなかった思いで、取り押さえようもなかった思いとするばかりであるが、「盗られた」ロゴやイラストが当初発表決定した時点の主題とかを大きく塗り変えられて全く別の主題を背負われて始動させられるのを見るのは誠に辛いものなのだ。

四十年前程前に、自分の会社の為に描きおろした賀状がある。そのイラストをそっくりそのまま会社ロゴにはめたある会社がある。ほとんど無修整でピタリと盗っていて妙な手もかかつてないので、怒りようもなく素のまま自分のデザインを茫然として眺めるだけである。盗った側の企業は社のシンボルマークとして使っているの、看板にも新聞広告にも媒体を広く活用して威勢がやたら良い。

盗られた当方は憤懣やる方なしの思いであるが、遥か昔の作品なれば、訴えても双方どうなるわけでもなしとして「腹立ち」は残して放置してしまう。

それでも、おさまっていた憤怒が、一瞬蘇るように胸を叩く時がある。――夕暮れのラッシュアワーを進行していた私の車に、不意に右から割り込んで来た箱バンその背後のドアに大きく拡大された私のイラストを見た瞬間、頭に血が昇り思わずアクセルを踏む。ラッシュの事とて犇めく車列は停止と進行を繰り返すので急停止になると盗まれたイラストの扉がこちらのフェンダーにのしかかる。それもエンジンのせいであざ笑いのリズムで眼前を揺曳する。信号で停止する。降りて捕えてどうなるものでもないのに、その気にもなる。信号が変わった。アクセルを踏みかためると箱バンは気づいたように右行左行を繰り返して先方車輛を追い抜き信号の変る直前をフルスピードで右折して走り去った。揺れる私のイラストの横に、逃げるが勝ちと書かれた幻影を私は見ていた。

了



うじはら・なみ
高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギスに在。国立ピシネク人文大学日本語日本文学科学科長。

「輝く今日とまた来るあした」のために

氏原名美

昨年テレビでも新聞雑誌でも戦後七十年特集が数多く組まれていた。日本は太平洋戦争終結から今に至る長い「戦後」を過ごしてきたが、第二次大戦後も世界各地で戦闘が止むことはなかった。二十世紀はまさに「戦争の世紀」だった。今世紀に入ってからテロとの戦いを大義名分に覇権を争う国家間の駆け引きで世界は一触即発の状況だ。

大学院の授業で「戦争と文芸作品」をテーマに軍歌と反戦歌を日露独英の四言語で振り返った。「二人の友が戦場で」という歌がある。ロシア革命後の内戦時代から歌い継がれていて、ソビエト映画の挿入歌にもなっている歌だ。ソ連崩壊後は人氣グループがカバーしてヒットした。歌詞にある「弾が飛んできて倒れた友を助け起こそうと手をやる」場面は、日露戦争が舞台の『戦友』を思い起こさせる。

『我が良き友』というドイツの歌にも「被弾して倒れた彼の手を取ってやれないまま、友は帰らぬ人」というくだりがある。十九世紀初頭のウーラントの詩に後で曲がつけられた二百年前の歌だ。実は、「二人

の友が戦場で」は第一次大戦東部戦線で敵陣から聞こえてきた『我が良き友』をロシアの将兵がロシア語に訳したものに由来する。『戦友』を作詞した真下飛泉も、ロマン主義の詩人で学者であったウーラントの作品を知っていたのかもしれない。

日本では一九三〇年代以降『戦友』を歌うことが禁じられ、ソ連でもベレストロイカ以前は「二人の友が戦場で」に対して否定的な批判がなされたという。いずれも戦意高揚の歌ではないからだ。

一九六〇年代は「戦争を知らない子供たち」の時代だった。団塊の世代と名付けられた人々には、学生運動の闘士にしても反戦フォークコンサートに集まる長髪組にしても、伝統を壊す迫力があつた。どちらも羨ましいと思いつつながら、我々はノンポリのしらせ世代だった。国の将来や社会の問題よりも「傘がない」のが問題だと歌い、学生運動の挫折を描いた『いちご白書』を「二人だけの思い出」にしてしまった。七十年代、八十年代の豊かさや平和に甘えていた。団塊の世代もいつしか社会と折り合いをつけた暮らしてに馴染んでいった。

でいった。

失われた二十年を経て、団塊の世代もしらせ世代もすでにおじいちゃんおばあちゃんと呼ばれる年になった。そんな両世代に尋ねたいし、自分自身に問いかけたくなった。四十年前、五十年前、「一体いつになったら(戦争の愚かさ)を悟るのか」と『花はどこへ行った』をとともに歌ったあなたたち、わたしたちが今、子や孫をまたもや戦場へ送ろうとしているのは何故なのかと。

二〇一五年は谷川俊太郎の『死んだ男の残したものは』から五十年の年でもあった。私たちは「輝く今日」を生きて「また来るあした」を残してやるためにも、国家の汚券より命が惜しいとは言えない時代がまた巡ってくるのを傍観してはならないと思う。戦争は「平和一つ残せなかった」のだから。

授業の終わり、「ウーラントやピート・シーガールの歌が国もことばも越えて歌い継がれてきたのに、戦争を無くせないのが悲しい」というのが学生の感想だった。声高な反戦論より、歌には訴える力がある。死んだ兵士の残したものは重い。

※「」は作品名、「」は引用語句

「暮し」を残す

前田 紀



『二人で 暮しの日記』
148×190/206頁/私家版

夫・兼松旦^{あたと}氏の俳句と妻・満子^{みちこ}氏の短歌を収めた句歌集。二人の思い入れが詰まった柚子園の写真などを織り込み、静謐さと彩りが合わさった一冊。

録」というか「暮しの日記」と受け止めるようになってまいりました。

いざとなると二人共皆様のお目にもふれることを、気恥ずかしいと感じているのではないかとも思っております。特に父は、こんなことになるといって「おい、おい、いいのかな……」と頭をかかえているんでは……と、はにかんでいる顔がふつとよみがえってまいります。今後ますます高齢化がすすむなか、私共後を追う者として、人生悲喜交々、どのように胸の奥に記して生きていくのか、道しるべになるような気もしております。

母が「海風」に入会させていたとき、短歌を糧として生き過ごせることは、母満子の生きる力になっていくことをつよく感じております。その間、国見純生先生は

亡き父が残した俳句帳を、十五年の間、父愛用の机の引き出しにしまっていた母が、九十歳を迎えた頃より、日頃とはちがいが、意を決したような表情で「夫の残した俳句と、自分が書きつづっている短歌を一冊の本にまとめたい」と言うようになりました。

娘の私は「ええ？ そんなこと」と聞きながして過ごしておりました。

二〇一四年、九十一歳を迎えた頃から、父の出身地である宿毛で過ごした時のことを、しきりとなつかしそくに話すようになりました。「お墓まいりに帰りたい」と。四万十市の江川崎で気温四十一度の最高記録を記した厳しい暑さの夏の日、親戚の皆様の好意にささえられて幡多路への小旅行に出かけました。久し振りに会えた感動と感謝を話してくれる表情は、

とても生き生きとしていて、最後の遠出になったのかも感慨深いものがありました。

秋の頃より、通院とデイサービスへ通う日々となりました。いつも離さず身近に置いていた雑記用の手帳に、今感じている思いをほつぽつと書きながら、静かに過ごしている母の姿を見ると、両親の歩んできた日々を、本という形にして残すことも、家族の記憶の一役になるのかもしれないと、自然に私の気持ちに変化してまいりました。そして父母の俳句と短歌を改めて読むことにより、二人が日々をどう生きたかを、またどういう思いで過ごしてきたかを知る良い機会を得たと思うようになりました。

心の目に深く響いた事象を、きめられた言葉数のなかに、ぎゅつと凝縮して表現、二人の「生活記

じめ皆様に多大なお世話になり、ご指導いただくことができました。お陰様で、この年齢になった今も、生活のリズムとして短歌が刻まれていることは、素晴らしいことと考えております。「海風」の会員の皆様に深く感謝申し上げます。お陰様で、両親が共に歩んだ日々のしるされた『二人で 暮しの日記』が私たちをなしましたこと、心より感謝申し上げます。 深謝

母の部屋にベッドを持ち込み、母が変化していく姿を見ながら過ごすようになってもう一年半。

瞳が私のベッドでお昼寝。九十二歳と五歳、おだやかな寝姿に、胸がほんわりと温かくなるひと時。

『二人で暮しの日記』あとがきより抜粋

昨年は、絵本制作十年目での出版で、節目の年になりました。知人、友人からの嬉しい便りや感想も届き、四作目の資料を集めたり次回作への準備をしています。出会った人たちやお世話になった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

絵本制作では、二十代の頃の東京生活や、インド、ネパール、タイでの旅の出会いや景色が心の底にあります。人は生まれ家族に迎えられる成長していきます。旅の中で出会った子供たちは決して裕福ではありませんでしたが、家族の愛に包まれ、貧しい生活の中で謙虚で平和に暮らしていました。

あれから随分経ち、生活が機械化され便利になると貧富の差は開くばかりです。宗教を信じている人たちが武器を持ち、世界中でテロや戦争が起きています。我が国でも自衛隊を多くの地域に派遣し、将来戦争に加担出来るよう

に、なんとか九条を変えようとしています。若い人たちを始め多くの人が命の大切さに気づき、各地で反対運動に立ち上がった一年でした。

私が尊敬するマハトマ・ガンジーの思想である非暴力が、今こそ必要な時ではないかと思えます。ガンジーは、長い間イギリスの植民地になり苦しんだインドを非暴力の抵抗で独立に導きました。

今、世界は武器商人が増え、紛争の解決は戦争で片づけようとしていて、毎日のようにどこかで戦争があり、毎日のように戦い関係のない子供たち、家族

の命が亡くなっています。

ガンジーは、塩の道の行進、イギリスの塩税に抗議し非暴力を貫きました。暴力では何も解決しない。何度かの断食を自身を挺して暴力を防ごうとし、自己の臆病や不安を乗り越えるべきであると主張しました。

許しは罰よりもさらに雄々しい勇気と力があることを知っていることだ、と言っています。非暴力、不服従の運動こそ、今必要ではないでしょうか。

今、思うと、全ての人が共に生きていくための思想と力ではないかと感じます。

日々の生活、出会い、時間は、

本と私 ②

当社で本づくりをされた方のお話

今、思うこと

町田 樹生

『月の谷のサポテン』



204×210/44頁
定価：本体1,200円(税別)

テーマは「地球環境」。自然界のバランス、自然と人が共存共栄すること―主人公シナモンの旅を通じて訴えかける。

新年恒例 全員雑がき

テーマ

「ウキウキ」

申年だもの!



★最近、娘と一緒にTSUTAYAに行きDVDを借りたりします。昔観た映画やアニメを思い出し、途中の何巻だったかと手に取って内容を確認したりするのがウキウキして楽しい時間です。成人した娘とは、お互い仕事で一緒にいる時間も少ないですが、共通の趣味で時間を過ごせるのもいいものです。(武村)

★私のウキウキしたことは「姪っ子」です。先日初めて二人目の姪っ子に会ったのですが、目が合う度に片手を上げてニコツとするのに笑ってしまいました。これから先どんなことが出来るようになるのかなと、二人の姪っ子の成長にウキウキします。(平山)

★今回のテーマが「ウキウキ」ということで私が思ったのは、休日の前日の夜に明日は何をしようと考えている時とか、宝くじが当

みんな違って、
みんないい」

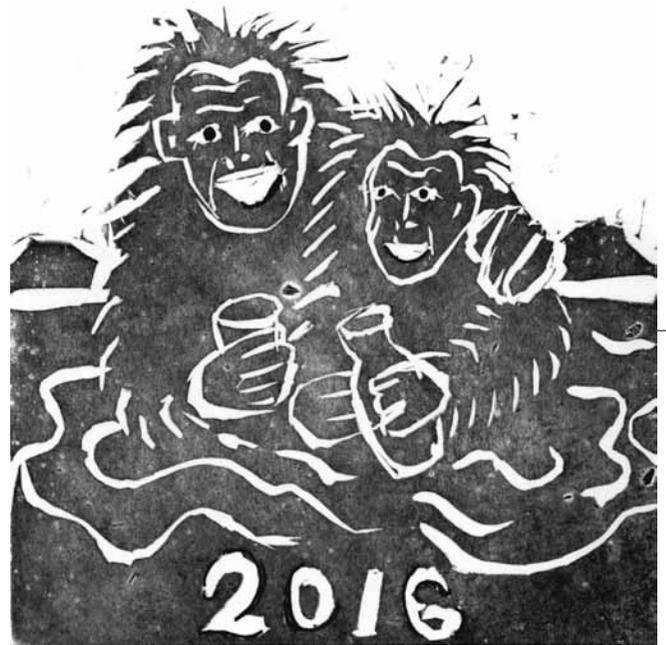
「みんな違って、みんないい」
人それぞれに何かしらの人生の目的や使命があるのではないかと思えます。今は解らなくても、答えはきっと自分の内にあるのではないでしょう。自分を信じ、人を信じ、前向きに生きること。いつも希望を持ち努力していくと必ず、何かしらの結果に繋がっていくと思えます。

現代の混沌とした世界で生きていくことはさまざまな問題が起きます。

命を頂いて、生きていることに感謝し、お互いを受け入れ合うこと。許し合うことができます。大切に思えます。

「小さな行いに忠実であり、いかに愛を注ぐか」とは、マザー・テレサの言葉で

HAPPY NEW YEAR



す。スラムの人たちへ一生を捧げた彼女の生き方、信条は今も世界中で受けつがれています。

ガンジーとマザー・テレサの両者にあつた「貧困を無くすこと」と、平和をもたらすこと。に必要なのは愛であり、共通の思いがあります。

幼な子は愛を表すのに、何の妨げもありません。愛することは、とても簡単なことだと両者

は言います。

これからの未来を担う子供たちが安心して暮らせる地球であるように、先人の知恵を今見直すべきではないでしょうか。

まちだ・みきお

現代社会の問題をテーマに自作の油絵と物語で絵本を制作し続けている。最新作『月の谷のサボテン』は昨年九月発行。いの町在住。

たつていたら何に使うか考えながら当選番号を見る(当たったためしがないが)とか、そんなことぐらいいですかね。(中村)

★私のウキウキは、仕事が終わって家に帰り、大急ぎで食事の支度(太郎の分も)をして、自分の口に合う手づくりの夕食とワインを手に「いただきます」を言う時。今日も忙しかったけれど充実した一日を過ごせたこと、元気でいられることに感謝をしながらウキウキしています。(永野雅)

★例年より暖冬が続いています。趣味の山野草がいつもより早く芽を膨らませてきました。その中でも斑入りヤマシヤクヤクを主に集めています。斑入りは毎年同じ柄になります。今年は上柄で一年間楽しませてくれるかウキウキしながら水やりをしている日々です。(黒原)

★今年の春、長女は中学生、思春期真っ只中への突入です！そして毎日笑いを届けてくれる次女は三年生、三女は何をしてもかわいー一才(親バカ^^)。何より子どもたちの成長がウキウキです!!

(永野美)

← つづく

人生がすべて宝物になる



みずき・わか
高知市在住。フリーライター、生涯学習コーディネーター。文章教室や漫画の原作教室など高知市を中心に開催している。

水木和香

現役で活躍できる職業での最高齢は詩人だそうです。使わない能力は衰えやすいと言われますが、朝起きてから夜寝るまでの間、お喋りしたり、テレビやラジオを視聴したり、新聞や雑誌を読んだり、メモを取ったりと、意識しないでも言葉をつるに使って生活しているのですから、私たちの国語力は日々磨かれ続けているのです。百歳を記念に初の詩集を出版した女流詩人もいらつしやるのですから、遅いということは決してありません。

けれども、いきなり原稿用紙に向かっ、さあ書こうというのは、ハードルが高過ぎるかもしれません。最初は思いついたことを忘れないように書き留めておく、備忘録から良いのです。それをきっかけに、思い出したこと、自分がこれまでに見聞きしてきたことを、少し丁寧に綴っていくだけで、アーカイブ（保存記録）が生まれてきます。

実は偉い人が書き残した公式文書ではなく、市井の人々が素直な気持ちで書き記した文章こそが、その時代を生き生きと表現しているとして、近年特に研究者たちに見直されています。自分の書いた

拙い文章が、人類にとつての貴重な財産になっていくというのは、あまりに壮大過ぎてピンと来ないかもしれませんが、積極的に保存・収集を行う団体も増えてきました。記憶だけでは失われる可能性もありますので、やはり書き残していくということが大切なのです。

特に高齢の方々の、これまでの人生で培って来られた知識と経験は、若者とは比べようもないくらい多様で膨大です。人間の喋る早さはおよそ一分間に四百字くらいと言われていますから、単純に計算しても一人の一日は一冊の本に匹敵しますし、一生は図書館に所蔵されている書籍数ぐらいいもなるのです。

書くことは脳を活性化させ、楽しい思い出を蘇らせてくれます。時には思いがけない発見があったり、試行錯誤が冒険のようにも感じられてきます。やがて書くことが趣味となり、生きがいになっていきます。楽しく書き続けていたきたいと思います。

水木さんの連載は今回が最終回です。長い間ありがとうございました。



★本屋さんでローカル線特集の雑誌を見つけた時（迷わず購入）。鉄道旅行地図帳を眺めてまだ見ぬ路線に想いを馳せる時。おトクなきつぷ情報を見つけて次の旅を夢想する時。実際のきつぷを手にした時……列車を巡るウキウキは乗ることだけにあらず。今年はどこへ行こうかな。（上月）

★時が過ぎるのはなんと早いこと。あつという間に巡ってきた。今年には年女です。健康に恵まれていることにあらためて感謝したい。これからも、明るく楽しく、ウキウキできる事を見つけてようと思う。十二年後の自分のためにも。（浜田）

★ウキウキするもの。連想ゲームのように思い浮かんだのは「東京ブギウギ」私のお気に入り。コーヒの香り、チョコレート、プリン、ひまわり、ガーベラ。ウキウキしている人、ご機嫌な人にご機嫌をわけてもらって、ウキウキになる。他力本願。（嶋崎）

★家にあるりんごを使ってそれにシナモンを足してデザートを作ろうと考えたらとても食べたくなり。この間ブラジル料理の店で食べたパイナップルのシナモン焼きが美味しかったので挑戦して

催し物案内板 〈1月～4月〉

激動の時代

「藩邸史料にみる幕末の京都」展

と き 1月23日(土)～3月31日(木)

開館時間 9:00～17:00 (※会期中休館日なし)

ところ 高知県立坂本龍馬記念館

入館料 大人(18歳以上)500円 (20名以上団体 400円)

高校生以下、高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被曝者健康手帳所持者とその介護者1名は無料

第65回 桜雲書道会百人展

と き 3月29日(火)～4月3日(日)

ところ 高知県立美術館ホール 県民ギャラリー
第1展示室

第4回 高知毎日書道展

と き 4月12日(火)～4月17日(日)

ところ 高知市文化プラザかるぼーと 7階
第1展示室

開館時間 10:00～18:00 (最終日は16:00まで)

西本百合展 一 空想庭園一

と き 2月9日(火)～3月21日(月・祝)

※毎週月曜休館 (月曜祝日の場合は翌日)

開館時間 9:00～17:00 (入館は16:30まで※最終日は15:00まで)

ところ 奥物部美術館

入場料 一般200円 (20名以上団体 100円)

長寿手帳提示半額、障害者手帳提示無料、高校生以下無料

お問い合わせ先

香美市立美術館

TEL 0887-53-5110

e-mail bijyutsukan@city.kami.lg.jp

第31回 草心会書展

と き 3月11日(金)～16日(水)

ところ 高新画廊

開館時間 9:30～18:00 (最終日は17:00まで)

入場料 無料

喜寿記念 田中白燿書展 一今を生きる一

同時開催 筒井孝枝展

と き 3月22日(火)～3月27日(日)

ところ 高知市文化プラザかるぼーと 7階
第4・5展示室



みたいです。

(谷本)

★毎日、中東問題によるテロや紛争、難民問題のニュースが絶えません。それに引き換え、大好きなイチゴをウキウキしながら食べられる幸せ。平和な日本の有り難さや大切さが今更ながら身にしみます。世界の人々に普通の幸せを感じられる日が一日も早く来ることを祈らずにはられません。

(川田)

★学生の頃にさかのぼってウキウキしていたこと。それは、よさこい祭り!! 夏になるとウキウキソワソワ。小学生の時は学校の夏祭りで踊り、高校生の時に初めて本場・よさこい祭りに参加! それ以来、不定期に五回程参加。最近、ウキウキしてないなあ。

(西本)

★ウキウキすることは一歳五ヶ月の三女の成長です! ヨチヨチと歩き、日々耳にする言葉を憶え、新しい事を吸収し、それを一生懸命表現している姿に家族全員で「かわいい」と絶賛しています! 三女だけでなく子ども達の成長には心からウキウキしています!

(永野正)

↑↑↑↑

わが家の太郎 ③⑥

理久ちゃん 永野 雅子

理久ちゃんは小学六年生の男子。飛鳥の元社員のお孫さんで、去年わが家の二軒となり越してきた。

三年前に亡くなったおばあちゃんより一つ上の私を「おばちゃん」と言ってくれる。

その彼が、太郎を散歩に連れて行くという。いつも朝は必ず歩くようにしているけれど、秋から春までは暗くなるので、夕方の散歩はなし。そんな私と太郎にしてみれば願ってもない申し出。

まず、散歩コースを案内がてら理久ちゃんに太郎のリードを預けてみた。

一番大事なのは太郎が催した時やり方を教えると、チラシを両手に広げて今かとばかり、太郎のお尻を追う姿がおかしい。

太郎も全く警戒する様子もなく、しっぽをふりふり理久ちゃんと散歩

歩に行くようになった。私も安心して仕事が出る。

家に帰ると、ウンチの入ったビニール袋が太郎の小屋の屋根に鎮座している。

運動の足りた太郎は食欲旺盛。三日分と思つて作った食事が二日でなくなつて、慌てておからや野菜を買いに走ることも…。嬉しいやら、忙しいやら。

時には「おばちゃん、一緒に行こう」と声がかかり、二人で何気ない話をしながら散歩する。

そんな理久ちゃんも春には中学生。息子たちもそうだったように、声変わりし、口数も少なくなつてくるだろうなと、まるでおばあちゃんの心境。

その息子たち、口数が少ないどころか会話にもならない。先日も大事な催しの反響はどうかと尋ね



理久ちゃん、まだかなあ

ると、「ぼちぼち」。体の調子はどう？ の問いかけに「まあまあ」。これは言葉だろうかと思つてしまふ。

東京にいる息子ときたら、荷物を送つてもなしのつぶて、何ヶ月も音信不通。いつかは「生きていますか」とメールをしたことがあった。

彼の誕生日に「誕生日おめでとう！ 便りの無いのは元気の印と思つています。母」と送つたら、すぐに返事が来た。たった一行、「その通り」。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役

★一月二日、潮江天満宮に友達と初詣へ。参拝を済まし、いざ、おみくじへ。箱へ手をのぼし、手に取ったくじをひらいた結果、大吉！ 昨年が吉だったのでも嬉しい限りでした。これから一年間、仕事も遊びも頑張り良い年にしたいと思います。

(前田)

★毎年のことですが一月から三月まで田作りをしています。四月に田植えをして八月に刈り入れをしています。その時に平均三十五袋の予定をしています。自然を相手にしていますので幾袋でできるかわかりません。それでも取り入れの時にはウキウキしています。

(垣内)

★ウキウキ(ワクワク)しながら、新刊を買つてきて最初の一頁を開く時。小説の場合も勿論ですが、私はやっぱりこの歳になつても漫画ですね。先日漫画コーナーへ。但し恥ずかしいのでさすがに長居はできません。サッサと買ってサッサと立ち去る。

(中内)

二〇一六年も
ウキウキな
一年にしよう

